時事新報

黒幕會議の結末

人の說に過日來政界に評判したる例の黒幕會議も案外に手輕く相濟み現内閣は此際大に奮發して萬般の政務を斷行し目下空位の内閣員を人撰し、條約改正の必要の爲めに法典を實行し、官吏登用法を改めて後進生出身の道を開き、遂には地價修正の說をも容れて議會の所望を滿足せしめんとするまでの異存なくして先づ以て其意に任せ飄然去て復た政府を顧みざる樣子なれば自今以後松方内閣は全く黒幕との關係を斷絶して獨立有力の政府と爲り進退自由自在にして其運命萬々歲なる可し殊に目下の政局輾しと云ふも唯議會に對して少しく面倒あるのみ是れとても能く〳〵議會の情實を探りて其眞意の在る所を聞取り讓る可きを讓り採る可きを採り之を友とし接して共に國事を謀るときは其協贊を得るゝと必ずしも難きに非ず從前の事實に徵するに政府の爲めに恐る可きは前門の議會ならで後門の黒幕にあるのみ今や後門の關係は既に斷絶したり養子も始めて若隱居の手を離れて別居の特典を得たるが如し今後着々家政の新面目を開て世間を驚かすゝとある可しと云ふものあり

黒幕會議解散の事跡に照らして之を觀へば如何にも前說の通りにて當るが如しと雖も爰に不審なるは黒幕の老政客が解散後毫も失望の色なくして平氣なるの一事なり今度會議の一條は眞實正味の秘密にして苟も會議者以外に會議の實を知る者なし故に我輩は唯その會議者の顏色を見て事を卜するのみ頗る迂濶の談なれども姑く賣卜者を學んで之を占はんに現内閣がいよ〳〵部外の老政客を謝絶して獨立獨歩の政略を施し一方に對議會の策を巧にして治安を維持しながら兩三年を經過するの場合には老政客は眞實の澁文出し後れのみか遂には政黨の萬年帳に上りて生涯出身の道はある可らず老客老したりと雖も其氣力は老ひてます〳〵盛にして明治政府の方針如何に就ては身を殺しても之を爭ふに躊躇せざる者なるに前說に從へば飄然去て政府を顧みずと云ふ、飄瓢大なるに非ず天下小なるに非ず身外の物纏て煩を爲すとは往古の隱士酒由を詠じたる句なれども我輩は何分にも今の黒幕を目するに酒由を以てするを得ず然るに實際政府を棄るゝと際士が瓢瓢を棄てたると同樣にして然かも之を棄て〻平氣なりとはなす〳〵疑なきを得ざるなり依て其平氣の點を押へて判斷するに老客は決して政府を棄てたるに非ず假令ひ表面の關係は斷絶するも其斷絶の間に無限の意味を含み既に其入閣の時節を期するゝと四月の春風に花期必ず到るが如くなるか、然らざれば花期に拘はらず開かんと欲すれば何時にても開いて見せると自から確に恃む所あるか、二者その一に居らざるを得ず蓋し明治政府に維新强藩の功臣あらん限り、其生命の絶えざる限り、其氣力の衰へざる限りは政權を棄て〻他に授るものに非ず時として内部に相爭ふて相容れざるが如き痕跡なきに非ざれども夫婦の喧嘩、一時の風波たるに過ぎず萬一の時に臨めば互に釋然洗ふが如くなるの常なれば黒幕必ず現政府を害せず政府亦黒幕を疎外せず意外の邊に情相通ずるゝとある可し近來政界に民論の盛なるに就ては其餘勢漸く政府部内に影響して多少の變動を催ほし遂には内に互に衝突して破裂するゝと憂る者あれども我輩の見る所を以てすれば又竊に喜ぶ者もあり事態甚だ切迫するが如くなれども我輩の見る所を以てするに民論の盛にして急劇なるは却て政府部内の一致を固くするの媒介にして幸に墻に鬩ぐの愚痴を止むるに足る可し今回黒幕會議の案外に穩なりしも或は此邊の事情には非ずやと漫に臆測を逞ふするものなり

雜報

○汁粉に醉ふの記

土京　金角江漁

人の心はゞ優にやさしく哀れにはかなきものはあらじ左るに時として猛烈火の如く活潑電の如きの勢を現はすゞ不思議なる、心力の斯く强盛なるは抑も如何なる場合なるやと尋ぬるに毫末も過去と未來とを思はず心火猛然として現在の尖頭に燃え立つ其一刹那に在り拿破崙憤然我に續けと叫んでロヨー河上彈丸雨の如き橋上に突進せる時、源九郎決然馬に鞭つ（鶴越の峻坂を奔下せる時、意氣奮揚雲を衝き勇威勃々當る可からず心に多恨のショセフィン夫人無く可憐の靜の前なし豈我身あらんや豈三千世界あらんや攻擊てふ現在の働き心身に充ち渡りて只奮進突衝あるのみ心力の强盛此に至て絶倫と云ふ可し敢て武夫のみに限らず汽關士線路に人を見て急き運轉を止めんとするが如き手弱女火事に逢ふて大事の簞笥を昇き出さんとするが如き總じて現在の所作に一心不亂なる其間みを人心の最も强盛振も活潑なる時なれ孤燈の下に過越力を思めぐらし身の行末を案じ煩ひ或は今古治亂興廢の跡を顧みて天下國家を憂ふるなど過去現在未來千々に心を配る其心はゞ哀れにはかなきは無し薄弱多病なるは無し嗟乎原頭鞭を揚げて牛羊を叱咤する野人の心はゞ爽快活潑なるはあらざるなり誤て讀書の人と爲り地角天涯にさまよふ孤客の心はゞ薄弱多病なるはあらざるなり現在の事は善惡共に快活なり未來の事は幾何か樂し過去の事に至ては限なく墓なし限なく離面し過ぎにし事の懷しく又懸敷は旅の身の常ながら風俗習慣の斯くばかり異れる土耳其に事もあらふに只一人、年餘の假枕わびしからで何としよう、廣き世界に旅の夢安からぬ日本人數多からんなれど江漁の如き字義通の孤客はありや無しや花の晨月の夕兎角に過にし事の忍ばる〻もオー尤じやと自ら云ひ自ら慰むるとあり（中の花清香を送らず松柏至る處に參差たり豈鬱鬱嘯の賓盟を思はざらん、朝夕飲むはシツコキ咖啡と牛乳にして三度の食事は油ぎき羊料理なり羊のみ油ならば堪可し一皿の野菜一椀の汁悉く油のギラ〳〵として浮き立つを見るアッサリ育ちたる味神經は鮮魚の洗ひを望み鮎の鹽燒を慕ふ折々は喟然として嘆じて曰く長鋏歸去來兮食に魚無しと、思ひは片意地なるものの出來ぬと知れば益々つのるものなり果ては饅の湯燒を思ひ栗のきんとんを思ひ燕菓子を思ひ汁粉を思ふ、且思ひ且語て之を行ふの力なき者はゞ世に厄介なるは無し江漁日本の美食を望んで之を製出するの技倆無く獨り懊惱に堪へざる折柄如山居士と云へる人飄然日本より到る旅なればゝそ初見の人も舊知に同じけれ談先づ日本の旨い物に及べば居士驚かず汁粉位は何でもない直ぐ出來ると云ふに氣を得、夫れ小豆を買へ無ければ印玄豆でも可し白餡却て高尚なりと手早く火を起し鍋を掛け其所に居士を据えてサア汁粉が食べられると小躍して待つ家苟若し在さば御まいは何時までも子供の樣だよ〻叱り給ふならん

小女一人にて出來る事を男二人掛りにて火を起し立て鍋を搔廻はし幾度か蓋をあけては見ゞめては見、片時も落付て居ねば中の印玄豆も五月蠅しとや思ひけんブク〳〵と腹立聲を揚げて湧き出したり是よりは餡に漉し上げる一段なるが麻の囊など云ふ氣の利いたもの無し偖何とせん今より麻の片を買ふて囊を縫ふは易けれども去とては盜を見て繩を綯に均し迂濶千萬男子の屑しとせざる所、兎やせん斯くやと暫時思案に暮れけるが江漁ハタと手を拍ち此頃新調して未だ一度も用ひざる麻の靴下數足あり時に取ての餡漉囊當意即妙の思ひ付如何に〳〵と云へば如山居士も左る者忽ち然る可しと同意しゥデ上りたる印玄豆をばヒにて幾遍となく搗立てたる後一人は靴下の口を開き一人は鍋を傾け見る〳〵數足の靴下に印玄の汁を詰め込み終りたり此上は餡に絞り上るまでのみと白餡汁粉手中に在りと勇み立ち靴下の口を絲にてッカと結び二人は金剛力を出して絞り初めたり左れども一向に餡の出づる氣色なし製餡容易の事に非ず本業の菓子屋さへ骨の折れる事と聞く況んや我々素人に於てをや此所が奮發の仕所ぞと互に勵まし勵まされ果ては エイ〳〵聲を揚げ凡半時許死力を出して腰搾したる甲斐もなくヤット一椀程の汁を絞り得たるのみ最早力も盡果てければ以前の威勢も何所へやらガッカリと成り是丈にても無きには優る半椀宛にても食べんものと泣く〳〵右の汁を集めて能く見れば白餡蔵て白からず何か薄墨にても交ぜたる如く其氣味わるきみと肺癆者の顏色を見るの思ひあり是は二人の手垢が入りしにはあらぬかと一人が云へば一人は物をも云はず佛然として之を戶外に投げ出しぬ（後に至て考ふるに製餡の法先づ小豆を煑て大量の水に和し之を漉して水中に沈澱せしめ然る後水を去り餡を取る可き筈なるに反對に餡を外に絞り出さんと試みたるゝを愚なれ斯く心付きたるも後の祭となりしぞ是非なき）費やすを知りて得るを知らぬ人疎ましと云ひしと今我身の上につまされぬ汁粉は何時でも朱塗の御椀にて出るものとのみ心得、其れ椀に入るまでの面倒考へて見たるゝも無き無謀の若者、道具とても無き千萬里外の土耳其に於て漉餡の御膳汁粉賞せんと思ひ立ちたるは抑も身の程知らぬ非望なり遺し餡の田舍汁粉にても旨く出來れば上々吉今此靴下の底に豪氣を殘したる印玄豆をば悉く鍋の中に打ゐけて田舍汁粉に劣さ晴らさんソーヨヤ〳〵と二人は我も折れ甲斐〳〵敷其用意に取掛りぬ日本一の大政治家にならうの支那四百餘州を席卷せんのと氣位のみ高くして心術拙き少年子弟が辛らき浮世の試驗に逢ふて初めて技倆の及ばざるを知り果ては判任の小官に得々たるに至るも丁度ゝんな理屈のものかと鍋を搔まはしながら獨り點頭も可笑し鍋中の印玄豆も早や能き程に煑え立ちたるゝ砂糖を入れよ心得たりと一人は惜氣もなく白砂糖を打入るれば一人は一遍搔廻して味を見る、少ないと云ふては入れ旨くないと云ふては入れ限り無きが如し入れる者は一心に旨い汁粉を得んと欲す豈一樽の砂糖を惜まん味ふ者は一回又一回舌、砂糖に慣れて砂糖の甘きを感ぜず何時までも甘み足らずと言張りて味ふゝと自若たり蒐集せるが如き場合にても更に手數を厭はず種々の試驗を爲せり然かも全く民間に於て特に地方を惑じて研究の結果なるが如し試驗を出願する者

○勅命第六十三號の審査所に於ける礦物の試驗を爲せり

○汁粉に醉ふの記

二人の製造者は先づ此靴下の底に豪氣を殘したる印玄豆を悉く鍋の中に打ゐけて田舍汁粉に劣さ晴らさんソーヨヤ〳〵と二人は我も折れ甲斐〳〵敷其用意に取掛りぬ日本一の大政治家にならうの支那四百餘州を席卷せんのと氣位のみ高くして心術拙き少年子弟が辛らき浮世の試驗に逢ふて初めて技倆の及ばざるを知り果ては判任の小官に得々たるに至るも丁度ゝんな理屈のものかと鍋を搔まはしながら獨り點頭も可笑し鍋中の印玄豆も早や能き程に煑え立ちたるゝ砂糖を入れよ心得たりと一人は惜氣もなく白砂糖を打入るれば一人は一遍搔廻して味を見る、少ないと云ふては入れ旨くないと云ふては入れ限り無きが如し入れる者は一心に旨い汁粉を得んと欲す豈一樽の砂糖を惜まん味ふ者は一回又一回舌、砂糖に慣れて砂糖の甘きを感ぜず何時までも甘み足らずと言張りて味ふゝと自若たり蒐集せるが如き場合にても更に手數を厭はず種々の試驗を爲せり然かも全く民間に於て特に地方を惑じて研究の結果なるが如し試驗を出願する者